

いなさの風

No.21

令和6年 12月20日

〒852-8011 TEL095-861-2650

長崎市稲佐町11番1号

長崎市立稲佐小学校長

岡田 政宏



学校教育目標 **たくましく未来を切り拓く子どもの育成**
「なりたい自分になる」いなさっ子の学びの多様化に応える

人権週間

人権感覚 磨けば光る 各学級で取組

12/4
12/10

自他を尊重する人権感覚を磨くことを目的に日常的に人権学習に取り組んでいます。この期間は改めて各学級で様々な取組を進めています。

稲佐小の日常的で特徴のある取組としては、『ホカテン運動』があります。自分や人を大切にする言葉や行動が10個できたら、「ホカホカ大使」となった子どもが毎日帰りの会で集計します。翌日、「いなさっ子委員会」の子どもたちが集計し、お昼の放送で知らせています。目標の二万五千ピースを

超え、次の目標は三万ピース。12月17日には、なかよし集会を実施し、実践を踏まえた各学級の思いを「人権標語」にして発表し、人への優しさや助け合う心の大切さを思いながら名曲「ピリッ」を合唱しました。詳しくは動画で！私が子どもたちに紹介した作文は裏面で！

なかよし集会

7月のニューオリンズプラスバンドがやってきた

12月12日、稲佐小体育館で、ブラック・ボトム・プラス・バンドのコンサートがありました。国内外でのライブツアーや有名ミュージシャンとの共演等を行っているほか、ユニクロのCMをはじめ、テレビや映画に多数の楽曲提供を行っている実力派です。当日は、ジャズバージョンの稲佐小校歌をはじめ、楽しいライブ

グとトックで子どもたちも大盛り上がりで音楽を楽しみました。ぜひ動画をご覧ください。



<https://bbbb1993.com/>

ブラック・ボトム・プラス・バンド ホームページ

※HPでは公開しません。

ブラック・ボトム・プラス・バンド 稲佐小ライブ

注）大きな音で演奏の様子が見えます。適切な場所でご視聴ください。
※ 学校よりでの演奏配信については、同団体から許諾をいただきます。

先生

No.21



今回は、しいのき学級担任の〇〇〇〇（〇〇〇〇）先生です。教える子の様子を家で楽しそうに話してお父様に影響されて教師を目指したのだそうです。子どもたちの「分からない」と悩んでいる顔から、「分かった」「できた」という笑顔に変わる瞬間が好き。好きな音楽は、ゴーゴーヴァニアというバンド。メンバーが大好きな漫画『ジョジョの奇妙な冒険』に出てくる言葉をつなげて命名したのだとか。

子どもに委ねる学びへの挑戦 ～1年生でもここまでできる～

12月5日に、1年1組で算数の研究授業を行いました。小学校スタート学年である1年生の最初の「委ねる」は、足し算の引き算の「コース選択」、学習内容をどのような順番で取り組むかの「順序選択」でした。教師とみんな一緒に学習のやり方を確認して早速スタート。得意な問題から：苦手な問題から：1年生なりですが、先生の言うとおりではなく、自分で選択・判断した学習なので、みんな意欲的です。後半、難しい課題には、みんなで相談しながら向き合

1年生 算数科授業

※HPでは公開しません。



1月の主な行事

- 17日 4時間授業（職員研究会参加のため）
- 20日 生活リズムチェック（24日まで）
- 26日 育成協もちつき大会

う協働的な学習の姿も見られました。キラキラのかわいらしい1年生の学びに向かう姿を動画でご覧ください。

成るように成る

しし座

〇〇先生

映画が大好きで毎週金曜日の「金曜ロードショー」は子どもたちからテレビ録画をして楽しんでいるのだそう。稲佐小の第一印象は「広い」「きれいな！」そして、子ども主体の劇で生活の決まりを全校に呼び掛ける生活集会の「いなさまン」すごい！

ケセラセラ

「小学校入学時には通常の学級と特別支援学級とどちらがよいのでしょうか。」昨年度、就学相談を担当する教育委員会の部署で勤務していたときに保護者の方からよく聞かれる言葉でした。結論から申し上げますと「その子の可能性を一番引き出せる選択肢を選ぶ」ということです。一定の支援があった方が、安心して生活を送れ、学習も集中できるのであれば、特別支援学級。支援がなくてもある程度自力で学習や社会性を磨いていけるならば通常の学級。というのが大原則です。通常学級の定員は35人（現在は1年生だけが30人です）、特別支援学級の定員は8人。おのずと一人の担任が、一人一人の子どもたちをどこまできめ細やかに見取り、対応できるか、想像に難くないと思います。裏面の小嶺さんの作文にあるとおり、支援学級に在籍していても一人一人の個性や苦手の程度に応じて、日常的に通常の学級と一緒に授業を受けることも多くあります。一人一人の苦手の改善や得意の伸長を図り、社会での自立をめざす「自立活動」にも計画的に取り組めます。「学びの場」は子どもの成長過程に際して、年度単位で柔軟に変えることができます。その子が、学習や生活の困難を乗り越えられる環境づくりを。



令和6年度 長崎県障害者週間作文 長崎県知事賞（最優秀賞）

「支えあい、助け合う」

長崎市立南陽小学校 6年 小嶺 彩

パラリンピックって何のことだろう？オリンピックのことは知っていました。でも、パラとは何なのだろう？それが障害とともに生きるアスリートたちの国際大会であることをようやく知ったのは、つい最近です。知るきっかけとなったのは、2021年の東京パラリンピックに出場した車椅子バスケットボールの選手の鳥海連志選手の存在です。

鳥海選手は、私が通う小学校の大先輩にあたります。校舎は当時のままなので、同じ空間で鳥海選手が過ごしていたと思うと、嬉しくもあり、不思議な気持ちにもなります。自慢できる先輩がいる嬉しさと、エレベーターもなく段差が多い校舎内でどのように過ごしていたのか、とても気になってしまいます。

考えてみると私の通う学校には、身体障害、知的障害などに対応する特別支援学級が四つあります。私はその学級にいるある男の子と授業の班が同じです。その子は、字を書くのが苦手なので、同じ授業の時は、班の人たちで字を薄く書いて、その子になぞり書きできるようにしています。また、委員会活動でもその学級の子と同じなので、漢字には読みがなを書きます。他にも、委員会活動で必要な文章と一緒に書いたりして、誰かのできないことを周りの人ができることに変えています。大変なことなんて全く感じずに自然にやっています。

いつもの学校生活を思い浮かべると、施設や設備が問題で過ごしにくいことより、周りの人たちの助けがないことの方が問題なのかもしれない、と感じています。鳥海選手が通っていた時も、もしかしたら周りのお友達がさりげなく手を差しのべていたのかもしれない。いつものことですが、苦手を感じているクラスメイトには、今までどおりのお手伝いをこれからも続けて過ごそうにしたいです。

（以下後半略）

